

第11回

「高次脳機能障害」

全人的包括的な神経心理学的リハビリテーションと関連して」

今回は、高次脳機能障害について、本シリーズのこれまでのレビューをさせていただこうと思います。

高次脳機能障害の難しさは、多くの因子が絡むことに起因すると思われます。従って、英国のフォーミュレーション Formulation のように、その評価は様々な因子をみることとなりますし、その目標も一つの因子を改善するだけでは足りないこととなります。当院では、安定した生活の再構築を目標とし、病棟生活、自宅生活、社会生活、職業生活と広げていくことを提案しました。

記憶障害、脳疲労、不安への対応も話題にさせていただきました。こうした対応法（ストラテジー strategy と呼びます）を手段（ツール）として用いて、その時目指すべき生活を安定化させていただけるとよいのだと考えています。なるべく多くのツールを知っていただくと同時に、それを良いタイミングで使い分けるマネジメントの能力もポイントになります。そして、identity の確立や well-being の達成を目指す。これは「自己の気づき self-awareness」と非常に近い概念なのだそうで、すなわち「己を知る」ということが目標になってくるわけです。

高次脳機能障害のリハビリテーションは、高次脳機能障害がない方にも有用となる。生きるとは何かということにつながる。ということは、悪く言えば曖昧模糊とした領域なわけですが、ポジティブに考えれば、いつまでも適応のための変化をしていけるということです。皆さんが「自分らしく生きる」ためには何をしていけばよいのでしょうか。identity とは多層構造なのだそうで、ということは identity を下支えする地味な毎日の活動や環境が思う以上に大事なことになるようです。

約2年にわたりました今シリーズもいよいよ最終回となりました。ご愛読、本当にありがとうございました。

(Thank you very much for your keen interest !

(青木 重陽)